

小学校における国際交流の重要性と成立条件*

——太宰府西小学校の日韓姉妹校交流の実践から——

田 淵 五十生**・太宰府西小学校国際交流委員会***

(社会科教育教室・福岡県太宰府市立太宰府西小学校)

要旨：太宰府西小学校と百済国民学校は児童の相互訪問を組み込んだ姉妹校交流を開始した。この試みは、新しいタイプの国際理解教育であり、他の教育現場のモデルになりうる実践である。学校、PTA、行政、地域が一体となって日韓相互理解に貢献しており、小学校段階においても、このような人間と人間の直接交流が求められている。

キーワード：国際理解教育、日韓相互理解、姉妹校交流

1. はじめに

国際理解教育の重要性が叫ばれ、全国各地の教育現場で地道な実践が積み重ねられている。これらの実践を形態的に大別すると、次の二つになる。一つは、社会科や道徳という教科の授業を中心にしなされるもの。もう一つは、修学旅行やホームステイなど外国人との直接交流を通してなされる体験型の国際理解教育である。

いうまでもなく、国際理解の教育は、単に知識の習得や概念の獲得を目指すのではなく、学習者に態度の変容や価値観の変革を迫る実践性の強い性格のものである。そのためには直接的な人間交流を組み込んだ学習形態がもっとも効果的な方法である。

けれども、語学的制約から小学校段階で行われているのは、留学生をクラスに招く実践に留まり、児童や生徒の直接交流を組み込んだ実践は中・高校段階に限定されているのが実情である。

節を改めて報告する太宰府西小学校は、姉妹校である韓国の百済国民学校と児童の相互訪問を組み込んだ全校規模の国際理解教育を開始したが、その取り組みは以下の五点においてユニークな実践である。

(1) 姉妹校がアメリカ・オーストラリア等の欧米ではなくてアジアの韓国であり、児童の直接的な交流をとり入れた全校規模の国際理解教育であること。

(2) 相互訪問・体験入学・ホームステイ等の体験型の学習形態と、学校行事・授業を有機的に

* The Importance and Conditions of International Exchange Programs in Elementary School.

** Isoo TABUCHI (Department of Social Studies Education, Nara University of Education) ;

***International Exchange Committee in Dazaifu Nisi Elementary School, Dazaifu, Fukuoka)

組み込んだ総合的学習形態をもつ国際理解教育であること。

(3) ホームスティの引き受け家庭を対象して、ハングルや韓国の生活習慣についての簡単な研修講座を組織するなどPTA活動と連携した取り組みであること。

(4) 形式的な姉妹都市縁組に終始しがちな地方自治体の国際交流のなかで、小学校が中心になって地域を巻き込んだ“Grass-Roots”(草の根)の国際交流であり、自治体もその意義を認めて財政的支援を行った実践であること。

(5) 教師、PTA、地域、自治体、留学生、それに国際理解教育の研究者(広島大学の江淵一公、奈良教育大学の田淵五十生)等が一体となってプログラムが実施され国際理解教育の到達点を踏まえた実践であること。

1989年、太宰府西小学校が30名の百済国民学校の児童を迎え入れ、1990年、36名の児童を百済国民学校に派遣して、最初の1サイクルを終了した。小論は、このプログラムがどのような経緯で実現したのか、また教職員がどのような準備をして実際にどのような交流がなされ、その結果児童や両親の意識がどのように変容したのかについての中間報告である。単なる先駆的な国際理解教育の実践報告にとどまるものではなく、今後ますます増大するであろう直接交流を組み込んだ国際理解教育のモデルとして、他の教育現場に示唆する報告であると確信している。

2. プログラム実現の経緯

韓国の小学校との姉妹縁組・直接交流のプログラムは、太宰府西小学校の創立十周年記念PTA事業として発案された。同校PTA役員の「新時代を睨んだ学校文化を創るような記念事業をしたい」という願いの中から国際交流の発想が浮上した。

まず、PTA事業企画委員会が組織されたが、そのメンバーは何らかの形で国際交流に係わっていた。例えば、PTA会長は韓国からの少年親善使節を自宅にホームスティさせた経験を持ち、副会長は福岡市役所に勤務して「アジア太平洋博覧会・子ども会議」の準備に奔走していた。また、委員会のメンバーである校長は、前任校で海外帰国子女教育に携わり、教務主任は米国子弟の体験入学を受け入れた経験を持っていた。

このように国際交流の経験をもつメンバーが多かったため、小学校における国際交流の教育的効果やその意義についての理解が深められ、PTAの予算的裏付けもあって、プログラム実現に向かって、大きく前進した。

つぎに、太宰府市役所を中心とする行政からの物心両面の支援が得られたことである。太宰府市と韓国・忠清南道の扶餘邑とは姉妹都市関係にある。それは、太宰府と百済の都・扶餘邑との長くて深い歴史に基づく縁組である。市長が姉妹都市交流の推進役を果し、いわゆる「草の根市民交流」の積極的理解者であった。最初の訪問団の帰国時、市長自ら空港に見送り、泣きながら別れを惜しむ日本の親と韓国の子どもの光景に感激して、姉妹校交流を継続するための財政的支援を表明した。

太宰府西小学校における日韓交流のプログラムは、このようなPTA役員、教職員、自治体等それぞれの経験に基づいた理解と熱意があって初めて可能になったのである。

3. どのような準備がなされたのか

(1) 教職員研修

プログラムの実施が決定されたが、教職員のなかに誰一人韓国に旅行した者はなく、韓国の小学校についての予備知識は皆無であった。しかも前例のない児童の直接交換を行う計画であり、教職員が不安を持つのは当然であった。

したがって、まず校内研修を持ち、奈良教育大学の田淵五十生から日韓関係の歴史と日韓相互理解教育の必要性について学び、その意義を確認した。またその後、ほとんどの教職員がハングル講座の特訓を受けた。その時ボランティアで講師を引き受けたのが、九州大学の留学生朴源君であった。彼はその後、引き受け家庭の母親たちが組織した準備会で、韓国の家庭生活や習慣を語り、日常会話を中心にしたハングル語研修の講師も引き受けた。

(2) 事前訪問

韓国児童の来日を前に、教職員と父母の代表からなる事前訪問団が派遣された。情報収集、基本的理解の不足を補うためである。しかしもう一つ狙いがあった。それは、日韓両国の父母と父母の間で意志の疎通を図り、保護者間での友好関係を樹立することであった。交流の主役は子どもであるが、その子どもを送り出し、迎え入れるのは父母たちである。この親であれば我が子を預けることができるという信頼感・安心感を確立するために、どうしても保護者同士の交流が必要であった。

教師たちにとってもこの事前訪問は非常に有益であった。相手校教師から親しみを込めた接待を受け、意見を交わすうちに不安が杞憂にすぎないことが判明し、同職者の共感が湧いてきた。自校の職員会議で交流プログラムの賛否が時に激しく論議されたが、実際に相手校の「人」と親しく接し、誠意に触れ熱意に圧倒されると、職員室での議論が小さく見え、また虚しくさえ思えるほどであった。人を動かすのはやはり「人」であり、国際理解においては人の直接交流に勝る方法はないと確信させられた。

(3) 児童の事前学習

田淵五十生の報告が明らかにしているように、大学生ですら隣国である韓国についての基本的な知識・理解が不足しており、「貧しい」「汚い」などというマイナスイメージを抱いている。小学生はなおさらのことである。太宰府西小学校の6年生の中で、韓国の首都ソウルが記入できたのは2%に過ぎなかった。

このような隣国についての無知・無関心を是正するために、各学年・各教科で何らかの形で韓国に親しみを持たせる事前学習が開始された。国語において韓国民話が、家庭科において韓国料理が、音楽においてアリランがというように――。

ある教師は、6年生の社会科の授業で「豊臣秀吉・鼻の領収書」と題する授業を主自編成して、全教職員に公開した。それは鍋島勝茂が朝鮮出兵に際して秀吉に書き送った「鼻受取状」を教材にした授業であった。授業を参観した田淵により問題意識の先行が指摘されたが、侵略された韓国の側から歴史を見つめていこうとする授業であった。

このような事前学習を組織する過程を通して、教師自身が「韓国について何も知らなかったし、

知らされてこなかった」ことを痛感した。

(4) ハングル語講座

4・5・6年生の全教室に韓国児童2人を迎えることになり、各クラスでハングル語講座が開かれた。いずれも実戦的に必要度の高いものから、しかも単語、定型文に限って学習した。

6年Aクラスでは、学級で大切にしている“あいことば”をハングルで覚えた。「ありがとう」「ごめんなさい」「大丈夫?」「おいで」「よかったね」。この教室では、この五つの言葉だけで学級での生活がやっていると確信している。事実コミュニケーションできたのである。

6年Bクラスでは、動作や表情で意思を通じさせようとボディーランゲージを特訓した。国語教材「心をつなぐ」でボディー行動と表情だけで意思が通じることを学んでいたからであった。また、全校の児童が自分の名札にハングル文字を書き添えた。ローマ字にも似た合理的なハングルに出会って、子どもたちは喜んでこの作業を行った。

(5) 児童会の準備活動

事前訪問で持ち帰った韓国児童の絵画が展示され、百済国民学校の様子がビデオで紹介された。それに伴って児童の関心も高まり、児童会の活動が活気づいていった。その活動の一つは、訪問者のための校内標識作りであった。「保健室」「トイレ」「職員室」「図書室」「放送室」「玄関」、これらをハングル文字に直し、矢印を入れて標識とした。最も必要なのが「保健室」であると言う子どもたちの相手を思う気持ちに、指導教師も胸を熱くした。

もう一つは、児童会の発案で韓国の友達に手作りのお土産を渡すことになり、6年生には「日本的なもの」という条件が付けられた。これまで純日本的なものと思い込んでいたもの、例えば、習字・こま・たこ等が韓国を経由して入って来たことを知り、日韓両国の近い関係に改めて気づかされた。児童にとっては、韓国の友人を意識したことにより日本人・日本文化を対象化して考えた初めての経験であった。

4. 太宰府西小学校でどのような交流がなされたのか

(1) 教室での交流

百済国民学校児童の滞在日程はわずか二泊三日で、その間の詳細なスケジュールは表1の通りである。学校に到着すると、児童は4年生以上の15クラスに2名ずつ体験入学した。給食で歓迎昼食会をして、昼休みには校庭で遊び、午後クラス単位で交流を深めた。

クラス交流の形態はさまざまで、クラス担任の主体性に任された。時間の全てをゲームや遊びに当てたクラス、音楽をやったクラス、中には算数をやったクラスもあった。

船酔いと睡眠不足とで給食にはほとんど手をつけなかったり、緊張感のあまり泣きだす児童もいたが、子ども同士すぐ溶け込んでいった。このようなクラス単位の交流を通して「私のクラスの〇〇さん」という親密感が醸成されていった。

表1 百済小児童滞在行动スケジュール

第1日 11月10日(金)

| 時 間 | 行 動 計 画 | メ モ |
|-------|------------------------------|--------------------------------------|
| 7:00 | 前日6時、扶餘発→釜山港より出国 →船中泊 | |
| 8:00 | 8:30 下関港着 入国手続き 朝食 | |
| 9:00 | 歓迎団と対面 | 学校職員代表&PTA代表 |
| 10:00 | ↓ 高速バスにて本校へ | |
| 11:00 | ↓ | |
| 11:30 | 学校到着 | 受入全学級で歓迎(玄関) |
| 12:00 | 挨拶 受入れ学級確認・案内 →各教室 | 学級代表による案内 |
| 12:20 | 給食 | |
| 1:00 | 1:10 昼休み | |
| 1:45 | 休憩 (本校児童清掃時間と平行) | 会議室&放送スタジオ |
| 2:00 | 2:10 受入れ学級での交流 | 5校時(ゆとりの時間or学級活動扱い) |
| 3:00 | | 各学級で立案、運営 |
| 4:00 | ホストファミリーと対面 ホストファミリー児童と下校 | 各ホスト来校(会議室) ホストファミリー指導・連絡等はPTAで行う |
| 5:00 | 各ホストファミリーでの家庭生活 | |
| 6:00 | 食事・遊び・テレビ・入浴 | |

第2日 11月11日(土)

| 時 間 | 行 動 計 画 | メ モ |
|-------|--|------------------------------------|
| 8:00 | 8:20 ホストファミリー児童とともに登校 | |
| 9:00 | “朝の会”等各学級活動 姉妹校締結式、交流会・交歓会 ・はじめの言葉・両校校長のお話 ・両校児童のあいさつ・姉妹校提携調印 ・来賓祝辞 ・百済小児童演技・本校児童演技 | →必要に応じて百済小教師による指導・準備 晴雨に係わらず体育館 |
| 10:00 | 10:30 記念植樹 記念撮影 休憩 | →百済小教師による指導 |
| 11:00 | 各教室で交歓 (この間、体育館では“十周年記念式典”準備。 ただし大人だけ。児童の式典は13日。) | 各学級で立案・運営 |
| 12:00 | ↓ | |
| 12:20 | ホストファミリー児童とともに下校 ホストファミリーにおいて昼食 | 12:20 “十周年記念式典” |
| 1:00 | | 1:00 “十周年記念祝賀会” 職員参加 |
| 2:00 | ホストファミリーでの家庭生活 地域でのコミュニケーション (受入れ家庭・地域で計画) | |
| 3:00 | ↓ 各家庭で宿泊(2泊目) | |

| 時 間 | 行 動 計 画 | メ モ |
|-------|-----------------------------|-----------------------------------|
| 9:00 | 社会見学(史跡めぐり・買物) | |
| 10:00 | | |
| 11:00 | | |
| 12:00 | お別れ式(本校) | → 公的見送り (職員・PTA・児童 各代表) |
| 12:30 | 学校出発(バスで空港へ) | |
| 1:00 | 出国手続き | |
| 2:00 | | → 見送り (韓国訪問教師・PTA ホストファミリー) |
| 2:10 | 福岡空港発 | |
| 3:00 | 釜山空港着 (バスにて扶餘市へ 夜9:00頃着) | |

4年生のある児童は、当日の感想を次のように書いている。

私は、韓国のお友達と「ハンカチおとし」をしました。言葉が通じないので、いろいろ不便で教えるのに、ひと苦労でした。でも、動作で教えて通じた時は、本当に胸がはりさけように、うれしかったです。

韓国の児童に直接触れた各担任の共通した感想は、次のようなものである。

- ・韓国児童はものおじしない。堂々としている。日本の子どもが押されている。
- ・見た感じでは(皮膚の色、目鼻だち、体型など)日韓児童の差は感じられない。
- ・やはり言葉の障壁はある。けれども、それは交流の決定的な障害とはならない。
- ・自分の学級の子どもたちに、普段と違う様子が見られた。普段の授業で精彩のない子どもが大活躍するのに比べ、「優等生」とされる子がリーダーシップをもちえない。

(2) 全校での文化交流

全校の文化交流が二日目の午前、表2の要領で体育館を使用して行われた。3年生以下の児童にとっては、前日校内放送のテレビで紹介されただけで、これが初めての対面である。会場にはPTA役員をはじめ父母たちも多数詰めかけ、韓国児童の披露する伝統芸能を見守った。2年生のある児童は次のように感想を書いている。

こうりゅう会でのおどりは、とってもすてきなおどりでした。じょうずでした。ビデオにでていたのより目の前で見たほうが、やっぱりすごかったです。こんなおどりやおことを見せられてよかったと思いました。

表2 文化交流の要領

1. はじめの言葉
2. 両校児童代表あいさつ 本校児童 百済国民学校学生
3. 演技披露
 - 加那琴 (百済小)
 - そうらん節 (西小)
 - 長鼓舞 (百済小)
 - 花笠音頭 (西小)
 - 扇舞 (百済小)
4. おみやげ交換
5. 全員合唱
 - アリラン
 - さくら
6. 花束贈呈 (両校児童代表から、相手校校長へ)
7. 校歌斉唱 百済小 西小
8. おわりの言葉
- (9) 記念植樹・記念撮影(両校代表参加)

十一月十一日の土曜日に、こうりゅう会があって、韓国の人のおどりを見ました。
 わたしが一番すごいと思ったのは、つづみでした。女の子がひとりでつづみをたたいていました。
 かたいっぽうは、ずっと同じところをたたいて、もういっぽうは右と左と、どっちともたたいて、むずかしそうでした。それをしながら、くるくるまわったりしていました。
 わたしは、そんなにまわって、目がまわらないのかな、と思いました。

民族衣装や楽器まで持参した韓国児童の演技は迫力があつた。なかでも、色彩と音色そしてスケールの大きさと三拍子揃った「扇の舞」には、会場の子どもも教職員も地域の人々も皆が息を飲んだ。誰もが韓国が独自の文化と伝統をもった国であることを認識した。相手国文化の確認とそれへの敬意が相手国民への尊敬につながるのである。文化交流の意義はそこにある。

一方、すでにクラスで交流していた4年生以上の児童は、もう一つ別の観点から演技を見守っていた。

恩恵(ウネ)さんのたいこ

6年 初井陽子

韓国の友達が来た二日目、韓国のどんなおどりをを見せてくれるのかが一番楽しみだった。私達から見たら変わった、きれいな着物を着ていた。その中で恩恵さんはどこにいるのか探した。きらきら光ったかんむりをしているのかな。でもいなかった。

椎名さんが、「あそこ、あそこ。」と言ってやっと分かった。赤と白のかわいい着物で、その着物を着ているのは恩恵さんだけだった。恩恵が真ん中でおどるんだ。

一番目が終わって、二番目になった時、恩恵さんが一人でたいこを持っていた。一人だけでおどるなんてすごいなあ。たいこの曲の中ですごく気に入った所があった。

たいこのおどり

6年 桑田賀世

交流会がはじまって韓国の子どもも入ってきた。背のびをしながらクラスにきた恩恵さんを探した。男の子はあまりわからなかったけど、女の子は一番さいごの一人だけ、ちがういしょうを着ていた。

韓国の芸と西小の芸をこうたいしてやった。なんだかくらべものにならないぐらい、韓国の方がうまくてきれいに見える。

恩恵さんの芸がはじまった。たいこを持ってステージにあがった。両側にたいこの皮がはってあって、ふたつの棒でたたくのだった。歩きながらいこを打って、ああいうふうにできたらおもしろい、と思った。

交流会はおわったけど、クラスでもいちどやってもらった。近くで見たほうがっこ良かった。

子どもたちの印象は人間関係を通して形成される。学級に体験入学して、わずか2～3時間程度のものであっても、言葉を交わし、同じものを食べた友だちがいて、他の29人とは全く別の感覚で友だちの演技を見ている。琴よりも、舞よりも、友だち関係にある「恩恵さん」の太鼓に親しみを持っている。

これを「好ましい身びいき」と言うことができるであろう。異文化である外国文化と接する時、「好ましい身びいき」を持って受け入れられ、あるいは先入観や伝聞等による憎悪の感情を抱いて接するかによって、「偉」文化にも、「夷」文化にもなる。異文化との交流はその文化を持っている人との関係が大きく影響する。小学校での国際交流は、異文化理解のための「好ましい身びいき」を育てる段階であってもいいのではないだろうか。

(3) ホストファミリーとの交流

太宰府西小学校の姉妹校交流には、家庭での交流が組み込まれていた。したがって、プログラムの成否は児童を引き受けるホストファミリーにかかっていた。ホストファミリーが集まるだろうかという企画委員会の不安に対して、希望家族は2倍を越えた。抽選でホストファミリーが決定されると、「ホストファミリー親の会」が組織され、留学生を講師に迎えてハングル講座が開始された。ある母親は、「家中にハングル会話が張りつけてあります。そこで必要になる会話を予想して。玄関にも、お風呂にも、トイレにも。」と笑っていた。

そのような熱意に支えられて、家庭での交流は予想を越えた成果を収めた。当初、われわれは

家庭交流に二つの目標を設定していた。一つは、韓国児童が一般家庭に入り、衣・食・住の生活を通して、異文化理解のための色濃い体験を得ること。もう一つは、ホストファミリーと韓国児童の間に“心の絆”を確立することであった。

事後、ホストファミリーを対象に行ったアンケート調査では、16家族全員が、①韓国児童に好感が持てる、②韓国児童とその家族に学ぶことが多い、③姉妹校交流の継続・発展を願う、④今までの対韓認識に誤りがあったと答えている。

このように、韓国児童とホストファミリーの間の“心の絆”は強く結ばれた。手記の幾つかを紹介したい。

特に子供がホームシックにならないようにするには、と家族で話し合いました。とにかく日本語でも手ぶり身ぶりで話してあげること。つねに家族の誰かがそばについてやることを実行しましたら、二日目は、一人でさくらやアリランや韓国の歌を口ずさみ、のんびりと観光、その他の行事ができました。たった三日間ではありましたが、別れの時はまるで親子の別離のような寂しさがこみあげてきて、涙してしまいました。今度、韓国に遊びに行こうと思っています。学校のお陰でとてもよい経験ができたことに感謝致します。

子供の頃、「朝鮮人！」という差別視したことばというか、風潮があったのを覚えています。直接的には言った経験はないつもりですが、やはり欧米人に対する感情とは違う感情がなかったとは言えません。今回の体験で思ったことは、顔つきも日本人と変わらないし、言葉はうまく通じなくても、情が通うことがよくわかりました。親戚の子を預かるのとはちょっと違って、本当にもう一人の子供が増えたようでした。大ぜいの中から私達を探す目は肉親の目のようでした。本当にかわいかったです。

わずか二泊三日間の接触でこれほどの意識変容をもたらす。これも、子どもを媒介にした「好ましい身びいき」であろう。受け入れ家庭にも同年令の子どもがいる。母であり父であるホストペアレンツには、彼らが無意識にわが子のように思えてくる。ある母親は、「私達のことをオットサン、オッカサン、子供達のことを、カオル、チヒロと呼び元気で明るく又たくましい二人でした。」と述べている。また、別の母親も「活発で明るい。少しわがままだったけど、子供らしくて、よくなつてくれました。可愛かったです。子供はどこの国の子も同じだなと思いました。」と述懐している。同じなのは子どもだけではない。母と子の世界も同じである。子どもが移動する交流を通して親同士の交流が開始される。事実16家庭の大半がその後、韓国を訪問して、彼らの“韓国の子ども”と再会している。

5. 百済国民学校での交流

1990年夏休み、希望者の中から抽選で選ばれた36名の児童が韓国を訪問した。百済国民学校で

の交流は、学級での体験入学も、学校集会形式の交流会も、そして各家庭でのホームスティも、すべて太宰府におけるそれとほぼ同じ内容・程度で行われた。スケジュールは比較的スムーズに進行した。太宰府と扶餘の場所の違いではなく、一回目と二回目の経験の差である。初めての受け入れと交流には困惑が多かったが、それが百済側の参考になっている。

日本側児童にとって、ホストファミリーと百済文化の遺跡を訪ねたり、学級へ体験入学して図工の授業を一緒に受けたり、リコーダー演奏やソーラン節に合わせて踊ったり、彼らの思い出は実に感銘深いものであった。紙数の制約上、ここでは彼らの感動は割愛して、全校児童が彼らの体験をどのように受け止めたかについて報告したい。

帰国後に報告会を持つことが確認された。それは36名の経験を単に個人的なものに終わらせるのではなく、全校児童に環元しようという意図からである。漫然と訪問するのではなく、報告者の問題意識を持って、百済国民学校や韓国の生活様式を観察しようというものであった。その意識が児童に学校代表という緊張感を抱かせる結果になり、交流をより充実したものにしたことは言うまでもない。韓国での見聞を、参加できなかった友達や下級生にできるだけ分かりやすく伝えようと、彼らはスライドを使用して発表した。

その報告会に参加した児童の感想を紹介したい。

ほうこく会のかんそう

3年 梶原いつみ

わたしは、ほうこく会でかん国の人のことをきいているんなことがわかりました。

わたしはまず、日本とあそび方がにているなあと思いました。だって、やきゅうがあるしサッカーがあるからです。それに女の子のあそびだって、おはじきやゴムとびとチェーリングがあるからにているなあと思いました。

わたしは、ちっともしりませんでした。そして食べものがほとんどからいものだそうです。わたしは、からい物ばかり食べてのどはかわかないのかなあと思いました。それからびっくりしたことは、かん国の人は日本とちがってしょっきを手にもたないそうです。わたしは思いました。スープとかをのむ時はどうやってのむのかなあと思いました。

それからもう一つびっくりしたことがあります。かんこくの人たちの家はたたみがないそうです。わたしは、かんこくと日本は、ちがうこともあるし同じこともあるんだなあと思いました。

かん国ほうこく会の感想

5年 吉村幸子

9月14日にかん国ほうこく会がありました。

私はいままでかん国のことを、きたない国だと思っていました。だけど、ほうこく会を見ると、きれいなところや、きたないところがありました。だけど、きれいなところがきたな

いところより多かったです。だから今度からは、見たこともない国をきたない国だときめつけないようにしようと思いました。

かん国のバスのまどはないと思っていましたが、日本のバスと同じように、まどがしっかりついていました。

それと、私は前まで、日本のキムチしか食べたことがないので、かん国のキムチも日本のキムチと同じように、あまりからくはないだろうと思っていましたが、おみやげがかん国のキムチだったので食べてみると、すごくからかったです。

「ほうこく会を見る」という表現がスライド上映の印象深さを物語っている。そして、子どもの手による情報伝達の大切さを示している。子どもが取材・報告し、それを共感的に受容する経験の分かちあいがなされている。「きれいなところや、きたないところがある」ことを、事実のまま受け入れ、「見たこともない国をきたない国だときめつけないようにしよう」と述べている。参加者は36名であったが、その成果は全校児童に豊かに還元されている。要は工夫次第である。

6. おわりに

第一回の交流が成功して以来、外国からの訪問者が多くなった。学校が目的を持って招聘する場合もあれば、地域住民・保護者が連れてくる場合もあった。半年間に、イギリス・アメリカ・スペイン・スーダン・ナウル・ベトナムから美術家・教師・公務員・大学生・小学生が来訪した。その都度、全校集会、学年集会、学級交流会と臨機応変に対応して受け入れを行ってきた。ナウルの小学生の訪問は不意であったが、プールで文字通り「裸の付き合い」を行った。こうして、外国人の来訪が「珍しいこと」ではなく「日常的なこと」になった。

また、姉妹校交流の推進役を果たしたある教師は、百済国民学校を訪れ、通訳つきではあるが、音楽の授業を実際に行っている。授業の内容は、「アリラン」と「太宰府西小音頭」をテープで聞かせて、日韓両国の音楽の共通点（5音階旋律）と相違点（三拍子主流と四拍子主流）に気づかせ、相手文化に親しみを持たせようとするものであった。当日その授業を、扶餘郡教育長、指導主事、扶餘町内5小学校長、2中学校長、百済国民学校教師が参観し、教師間交流の意義とその必要性を認識した。これは、授業を通して語り合うという教師間交流の在り方を示す先駆的な試みである。

このように、太宰府西小学校の国際交流活動は広範かつ多彩になりつつある。最後に、太宰府西小学校の姉妹校交流を可能にした条件を指摘して、小論のむすびとしたい。

まず第一は、教職員の積極的な対応である。外国の小学校と姉妹校締結して、児童の国際交流を行うというPTA事業企画委員会の発想は画期的であった。けれども、それを具体的に実施するのは教職員である。その決定は、恐らく「青天の霹靂」であったに違いない。その「青天の霹靂」を、新しい国際理解教育実践の「千載一遇のチャンス」と受けとめた教職員の前向きな対応があったからこそこのプログラムは実現したのである。

第二は、PTAと密接な連携がなされ、その組織から物心両面の支援を受けたことである。地

域ぐるみの国際交流に発展したのは、ハングル講座まで組織した“ホストファミリー親の会”の熱意があったからである。そして彼らの積極的な協力がこのプログラムの質を高めている。

第三は、独自の事業資金を有していたことと、その使途について柔軟性が保障されていたことである。その意味でPTA事業資金と太宰府市からの財政的支援に負うところ大である。教育現場を活性化するための教育プログラムには、自由裁量の資金がどうしても必要である。けれども、国立大学を含め、日本の教育現場の予算執行は硬直化してしまっている。学校の「国際化」や教師の「国際化」を叫ぶ前に、教職員の創造性や自主性を外国並みに尊重する教育行政の「国際化」が求められている。

第四は、地域、行政、留学生、研究者など学校外の人々との有機的連携である。一般的に、学校行事は学校内の教職員だけという意識が非常に強い。いうまでもなく、学校の力量には限界がある。周囲の人々の支援や地域の教育力に依拠して、学校の教育力は強力に発揮される。学校外の衆知を集める教職員の柔軟な姿勢が大切である。

残念ながら日韓両国民の感情的親密度は、決して良好ではない。もちろん、その原因は戦前の植民地支配に起因している。けれども、事態を深刻にしているのは、その反目を改善する努力が長い間なされてこなかった点にある。

しばしば指摘されるように、両国間の関係は、壁を隔てて望遠鏡で覗き合う隣同士に例えられる。その望遠鏡には相手の長所を縮小し、短所を拡大するズームレンズがついている。歪んだレンズがマスコミの伝えるステレオタイプな相手国像であることは言うまでもない。

けれども今、太宰府西小学校の校区の人々と百済国民学校の校区の人々は、歴史の過程で形成された「心の壁」に風穴を開けて、子ども同士の交換を開始した。そして、自分の目で相手の実像を見ようとしている。時には「好ましい身びいき」という感情をもって——。それも交流を重ねて行くうちに是正されていく筈である。

なにはともあれ、日本の小学校のなかで最も暖かい隣国認識を持っているのは太宰府西小学校の児童たちであろう。20年後、30年後、彼らの中から玄界の架橋的役割を果たす人物が輩出するかもしれない。なぜなら、親しい友人のいる国への理解は必ず違ってくるからである。そのような未来への夢を育んだのは、教職員の試行錯誤の実践があったからである。

もちろん、このプログラムにも課題や矛盾が山積している。しかし、新しい教育課題に取り組む場合がそうであるように、国際理解教育においても拠り処となる「教育理論」は存在しない。もしあるとすれば、それは一つひとつ実践を積み重ね、その中から経験的に法則化されて理論になるのである。その意味で、児童の直接交流を組み込んだ国際理解教育の実践は、緒についたばかりなのである。

参 考 文 献

- (1) 小嶋俊郎「姉妹校づくりからの国際理解教育を求めて」 中西晃編著『教室からの国際化』所収 ぎょうせい 1991
- (2) 国淵五十生「韓国・朝鮮および在日韓国・朝鮮人理解の教育内容の創造」『国際理解』19号

1987

- (3) 江淵一公「文化人類学の視点からみた国際理解教育の現状と課題」『日本比較教育学会紀要』
4号 1978
- (4) 永井滋郎『国際理解教育に関する研究』 第一学習社 1985